



Title	隠喩・直喩の多義性とその指導：詩的言語教育論（1）
Author(s)	藤原, 顕
Citation	教授学の探究, 12, 155-167
Issue Date	1994-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13591
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_p155-167.pdf



隠喩・直喩の多義性とその指導

— 詩的言語教育論 (1) —

藤 原 顕
(大阪外国語大学・非常勤)

1 はじめに

文学作品の読み方指導の主要な目標として、子どもたちが作品をより「豊かに」解釈できるようになること、があげられる。この場合、「豊かに」とは、例えば作品の表現が明示していない、つまり暗示する内容をも解釈できることである。また、ある表現を多様に、つまりいく通りにも解釈できることである。

こうした明示されない内容の解釈を促したり、多様な解釈を促したりする文学作品の表現上の機能を、ここでは「多義性」と呼んでおこう。つまり、文学作品には、多義的な解釈を促すような表現機能を見出せるのである（藤原・山住, 1988, 藤原, 1989 b 参照）。

こうした多義性を見出せる文学作品の表現の典型として、比喩表現をあげることができる。つまり、比喩という表現構造は、多義性という表現機能を発揮することが多いわけである。従って、文学的散文であれ、詩であれ、そこに見られる比喩表現の解釈を指導しようとする場合、その多義性に対応した解釈を促すという観点が必要になる。

本稿では、こうした比喩表現の多義性に対応した解釈を促す指導はどうあるべきか、という問題を考えたい。この問題には、後述するように、発問構成など指導方法論だけではなく、そうした指導では何が教育内容となるかという教育内容構成論の問題も含まれることになる。

また、本稿では、様々な比喩のうち、隠喩 (metaphor) と直喩 (simile) を取り上げたい。一般に、比喩は、「類似性」に基づく隠喩・直喩と、「隣接性」に基づく換喩 (metonymy)・提喩 (synecdoche) とに分類できる。隠喩・直喩については、これまでの文学作品の読み方指導の中でもしばしば言及されてきた。しかし、換喩・提喩については、ほとんど言及されることがない。また、換喩・提喩については、それらがはたして比喩として扱えるのかという議論も、現在の比喩理論には見られる (Ruwet, 1975 参照)。つまり、よく知られた隠喩・直喩とは違って、換喩・提喩には、比喩理論、比喩指導の両面において考察すべき問題が多い。そこで、換喩・提喩については稿を改めて取り上げるとして、本稿ではとりあえず対象を前者の隠喩・直喩に限定したい。

以下、隠喩・直喩理論を援用しながら、現在の隠喩・直喩指導の問題点を指摘する。また、比喩表現における多義性という表現機能の内実を、そうした比喩理論をに基づいて明らかにする。そして、多義性に対応した解釈を促すという観点から、隠喩・直喩指導はどうあるべきかを考える。その際、素材として、隠喩・直喩がよく現われる詩作品の読み方指導を取り上げる。

2 隠喩・直喩理論と隠喩・直喩指導

2.1 隠喩・直喩指導における問題点

現在の隠喩・直喩指導には、隠喩・直喩理論から見ると、いくつかの問題点を指摘できる。それらは、およそ次のように整理できる。

- (1) a. 隠喩解釈の指導において「喩辞」から「主辞」への復元しか行わない¹
- b. 隠喩解釈の指導において隠喩の基本形が意識されていない
- c. 隠喩と直喩について表現構造上の区別しかない

以下、(1a)、(1b)については2.2で、(1c)については2.3で、現在の隠喩・直喩指導を検討しながら述べてみよう。

2.2 隠喩の多義性

2.2.1 隠喩の復元指導における問題点

現代の隠喩理論において先駆的な役割を果たしたブラック (Black, 1955, p. 278) は、「隠喩的表現はそれに等価な字義的表現の代わりに用いられているという説」を隠喩の「代用説」と呼んでいる。この立場では、隠喩表現は、「字義的表現」の代用に過ぎないことになる。従って、そうした場合、隠喩解釈では喩える側の喩辞と何らかの点で「等価な」、すなわち類似した喩えられる側の主辞を見つければよい。

こうした「代用説」的な観点に基づく場合、隠喩解釈の指導は、喩辞に対応した主辞を考えさせることにつきる。つまり、その場合、子どもたちに喩辞を主辞に、言わば復元させればよいのである。

例えば、嶋岡晨《虻》(1, 2連)における隠喩指導を見てみよう(下線は引用者)。

- (2) 落石におびえつつハーケンを打ち
雷鳴におののく手でザイルをたぐり
汗にまみれてよじ登った
山

いつもはおとなしいが
暴れだしたら手のつけられない
大きな牛
ぼくらはその肩にとまった
虻みみたいなものだ

(2)の隠喩表現《大きな牛》について、例えば小学校5年の授業で、浜上(1990 a, pp. 13-31 参照)は『『大きな牛』は、何をたとえているのですか』と発問している。この発問は、《牛》を

〈山〉に復元させるものである。そして、〈山〉を〈牛〉で喩えることについては、それ以上解釈を促してはいない。こうした隠喩における喩辞を主辞に復元するだけの解釈では、前述のような隠喩の多義性に対応した解釈を行っているとは言えない。

2.2.2 隠喩の種類

では、隠喩について、ただ喩辞を主辞へと復元するだけでなく、その多義性に対応した解釈を行なうためには、どんな観点が必要なのか。その観点を明らかにするために、隠喩にはおよそ三つの類型があり、そうした類型中には基本形が見出せることを確認しておこう。

まず第一の隠喩類型は、「対象指示型」である。これは「ある対象Xを指示するのに、元来は他の対象Yを指示するために用いるシンボルを借用する用法」（橋元, 1989, p. 147）である。例えば、〈泳ぎの上手な人が泳いでいる〉ことを〈とびうおが泳いでいる〉と表現する場合である。また、(2)に引用した《虻》における隠喩表現《大きな牛》も、この類型に相当するであろう。つまり、この詩では、本来は〈山は、いつもおとなしいが暴れだしたら手がつけられない〉となる。それを、〈大きな牛は、いつもはおとなしいが暴れだしたら手がつけられない〉としているわけである²。

第二は、「用言述定型」である。これは「ある対象の動作・状態を述定する際に、本来他の範疇の対象を述定するために用いられる動詞・形容詞を援用する用法」（橋元, 1989, p. 148）である。例えば、次の草野心平《石》（1連）を見てみよう（下線は引用者）。

(3) 雨に濡れて。

独り。

石がゐた。

億年を蔵して。

にぶいひかりの。

もやのなかに。

この詩における《独り。／石がゐた。》という隠喩表現はこの類型に相当する。つまり、〈石が、独りいた〉のような隠喩である³。

さらに第三は、「体言述定型」である。これは、いわゆる〈XはYだ〉という型の隠喩である（橋元, 1989, pp. 148-149 参照）。例えば、次の新川和江《わたしを束ねないで》（1連）を見てみよう（下線は引用者）。

(4) わたしを束ねないで

あらせいとうの花のように

白い葱のように

束ねないでください わたしは稲穂

秋 大地が胸を焦がす

見渡すかぎりの金色の稲穂

この《わたしは稲穂》という隠喩表現のように、「体言述定型」隠喩は、二つの辞項が連辞す

る型をとる⁴。

2.2.3 隠喩の基本形

この「体言述定型」と先の「対象指示型」・「用言述定型」との違いは、前者に後二者が還元できる、という点にある。つまり、「体言述定型」隠喩は、類型中の基本形であり、他の二つの類型はこの基本形から派生するとみなせるのである。

例えば、「対象指示型」の例とみなした《虻》の隠喩の場合、次のように解釈することができる（橋元, 1989, pp. 159-161 参照）。

- (5) a. <大きな牛は、いつもはおとなしいが暴れだしたら手がつけられない>
- b. <山は、大きな牛だ>
- c. <山は、いつもはおもなしいが暴れだしたら手がつけられない>

この場合、(5a)の隠喩では主辞〈山〉は明示されず、喩辞〈牛〉が命題の主部に相当する部分に表示されている。そして、主辞は、(5a)の解釈内容としての(5b)、すなわち基本形である「体言述定型」隠喩における主部に相当する部分に表示される。さらに、(5b)の解釈内容としての(5c)は、(5a)の本来の内容に相当する。つまり、(5a)は、(5b)を基本としながら、(5b)と(5c)との、言わば合成によって成立しているとみなせる。

一方、「用言述定型」の例とみなした《石》の隠喩については、例えば次のように解釈できる（利沢, 1985, pp. 89-92, 橋元, 1989, pp. 161-165, 小泉, 1990, pp. 189-191 参照）。

- (6) a. <石が、独りいた>
- b. <石は、(例えば)孤独な人だ>
- c. <孤独な人が、独りいた>

この場合、「対象指示型」とは異なり、主辞〈石〉は明示されている。では、喩辞は何かと言うと、それは基本となる(6b)の「体言述定型」隠喩に表れる〈孤独な人〉とみなせる。つまり、「用言述定型」隠喩では、喩辞は明示されない。ただ、明示されないものの、その喩辞にかかわる「述定」が行われて喩辞となる辞項が暗示されている、とみなせる。例えば、(6a)の場合では、〈独りいた〉という「述定」を解釈して、暗示された喩辞〈孤独な人〉という解釈内容を得ている。その結果、基本となる「用言述定型」隠喩に相当する(6b)が、成立する。そして、この(6b)と、(6b)の解釈内容としての(6c)の合成によって、(6a)が成立する⁵。

このように、「対象指示型」と「用言述定型」とでは、基本となる「体言述定型」隠喩の成立の仕方に差がある。つまり、前者では、基本形に還元すると、その隠喩の主辞が明らかになる。そして、この主辞は「たとえ現前にはなくとも同定可能な具体的事象」（橋元, 1989, p. 164）である。従って、この場合、喩辞から主辞への復元が容易に行われる。一方、後者では、基本形に還元すると、その隠喩の喩辞が一応明らかになる。ただし、この喩辞は「必ずしも具体的に同定しえない漠然とした『カテゴリー（正確には、あるカテゴリーに属する不確定要素）』」である（橋元, 1989, p. 164）。従って、(6b)における〈孤独な人〉は、そうした「不確定要素」の一つにすぎない。しかしながら、両者とも、「体言述定型」隠喩を基本として成立している点

は、同じとみなせる。

以上のように、隠喩の三つの類型は、〈XはYだ〉型の「体言述定型」が基本形となる。こうした観点があれば、隠喩指導が単なる復元だけの指導にとどまることはない。

つまり、隠喩の三つの類型のうち、「対象指示型」の隠喩解釈においては、前述のように喩辞から主辞への復元が容易であるだけに、復元のための指導にとどまりやすい。例えば、《虻》における(5a)の場合、〈牛〉を〈山〉へと復元するように、である。しかし、多義性に対応した隠喩解釈としては、これでは不十分である。復元によって主辞・喩辞をともに明らかにした後、基本形である「体言述定型」隠喩として解釈していくことが必要となる。例えば、(5a)は(5b)として解釈する必要がある。つまり、喩辞〈牛〉と主辞〈山〉という二項を対立させて解釈するのである。

また、「用言述定型」でも、同様にその基本形である「体言述定型」隠喩として解釈していくことが必要となる。例えば、(6a)は(6b)として解釈する必要がある。つまり、主辞〈石〉と喩辞〈孤独な人〉という二項を対立させて解釈するのである。

このように、「体言述定型」隠喩の解釈が、隠喩解釈全般の基本になる。そうすると、隠喩解釈では、主辞と喩辞という、言わば異質な二項対立の解釈がその基本形となるわけである。この点に、隠喩表現が多義性という表現機能を発揮する要因を見出せる。そこで、次に、こうした隠喩の基本形の解釈の仕組みについて考えてみよう。

2.2.4 隠喩の基本形の解釈

〈XはYだ〉型の隠喩解釈の仕組みについては、これまでの隠喩理論でよく論及されている⁶。この型の隠喩解釈の仕組みは、一般に次のように考えられる。

- (7) a. 喩辞〈Y〉を解釈して、〈Y〉に関する様々な解釈内容⁷を得る
- b. 〈Y〉の解釈内容のうち、主辞に当てはめるべき解釈内容⁸を選択する
- c. 〈Y〉の選択された解釈内容を当てはめて、主辞〈X〉を解釈する

このように、隠喩解釈とは、主辞〈X〉と喩辞〈Y〉について、基本的には〈Y〉のある解釈内容を当てはめて〈X〉を解釈すること、となる。

例えば、(4)の《わたしを束ねないで》の隠喩表現《わたしは稲穂》に関する指導例を見てみよう。中学校3年の授業で、川島(1991, p. 85 参照)は、この隠喩表現について次のような指導を行っている。まず、「稲穂の情景をとらえよう」という発問で、「秋」、「田舎の広々としたたんぼ」という解釈を促している。また、「実をいっぱい付けて穂のところが垂れ下がっている」、「金色にキラキラ輝いている」という解釈も促している。次に、「そういう稲穂のような『わたし』はどんな人でしょう」という発問で、「稲穂がしっかり実を付けているように、実力のある人」という解釈を促している。また、「稲穂一本一本がそれぞれに実ってキラキラしている。そういうように一人の人間として個性を発揮することができる人」という解釈も促している(下線は引用者)。

この指導の隠喩解釈は、上の(7a)から(7c)にほぼ対応している。つまり、まず喩辞である〈稲穂〉の解釈を行っている。そして、喩辞の解釈内容のうち、とりわけ〈実をいっぱい付けて〉、〈キラキラ輝いている〉を主辞〈わたし〉に当てはめて解釈している。そして、〈実力

のある人)、〈個性を発揮することができる人〉という解釈内容を得ている。

ただし、先に、異質なある辞項(主辞)と別の辞項(喩辞)を対立させたのが、「体言述定型」隠喩である、と述べた。こうした異質な二項の対立は、普通それ全体で新たな意味を生み出すとみなせる。つまり、対立する二項XとYの解釈においては、YからXへとともに、XからYへという「双方向」的な影響があるとみなせる(藤原, 1985 参照)。

そうすると、(7)で述べた隠喩解釈の仕組みは、やや一面的であることになる。つまり、(7)では〈XはYだ〉における喩辞〈Y〉から主辞〈X〉への影響、すなわち〈Y〉のある解釈内容を〈X〉に当てはめることにしか言及していない。しかし、(7b)にあるような、〈Y〉の様々な解釈内容のうち、主辞に当てはめるべき解釈内容の選択は一体何に依拠するのかという問題には、(7)は言及していない。

こうした喩辞の解釈内容の選択は、主辞〈X〉についての解釈内容に依拠する。例えば、先に引用したように、《わたしは稲穂》の場合、喩辞〈稲穂〉については様々な解釈内容が考えられる。すなわち、〈秋〉、〈田舎の広々としたたんぼ〉、〈実をいっぱい付けて穂のところ垂れ下がっている〉、〈金色にキラキラ輝いている〉などである。しかし、下線部の解釈内容は、主辞〈わたし〉の解釈のためには当てはめられていない。それは、主辞〈わたし〉の、言わば〈人間的要素〉にかかわる解釈内容と整合しないからである。つまり、主辞〈わたし〉の〈人間的要素〉にかかわる解釈内容が、そうした喩辞〈稲穂〉の〈非人間的要素〉にかかわる解釈内容が当てはめられるのを阻止するのである⁹。

このように考えると、先の(7b)は、次のように修正することができる。

(8) b-1. 主辞〈X〉を解釈して、様々な解釈内容を得る

b-2. 主辞〈X〉を解釈内容に即して、〈Y〉の解釈内容のうち主辞に当てはめるべき解釈内容を選択する

つまり、〈XはYだ〉の隠喩解釈では、喩辞〈Y〉のある解釈内容が主辞〈X〉に当てはめられて〈X〉が解釈される。そして同時に、そうした〈Y〉の解釈内容を当てはめることは、〈X〉の解釈内容によって規定される。このように、隠喩の基本形の解釈では、主辞と喩辞の間に「双方向」的な影響を見出せるわけである¹⁰。

こうした隠喩解釈における主辞と喩辞の間の「双方向」的な影響によって、隠喩表現は多義的に解釈できることになる。つまり、喩辞のどんな解釈内容を主辞に当てはめるか、またそうした解釈内容を選択するために主辞をどう解釈するかは、解釈者の判断に委ねられている。例えば、先の《わたしは稲穂》という隠喩では、必ずしも〈わたし〉の〈人間的要素〉に即して〈実をいっぱい付けて〉、〈キラキラ輝いている〉という解釈内容を当てはめる必要はない。〈わたし〉の〈非人間的要素〉と言える〈自然的存在〉という解釈内容に即して、〈自然の恵み〉という喩辞の解釈内容を当てはめてもよい。その場合、主辞〈わたし〉は〈人間の作り出した社会的な約束事に束縛されない自由な存在〉と解釈できるであろう。このようにして、隠喩は多義的な解釈を許すわけである。

2.2.5 他の類型の隠喩解釈

隠喩の基本形の解釈の仕組みが明らかになったところで、これが他の類型の隠喩解釈にどう

適用できるか、検討してみよう。こうした検討は、(1b) であげた隠喩解釈の指導において隠喩の基本形を意識することの必要性を明らかにしてくれる。

例えば、黒田三郎《支度》における隠喩指導を見てみよう。この作品では、《何の匂いでしょう／これは》、《これは／春の匂い／真新しい着地の匂い／真新しい革の匂い／新しいものの／新しい匂い》という1, 2連に続いて、次の3連がある。

(9) 匂いのなかに

希望も

ゆめも

幸福も

うっとり

浮かんでいるようです

この表現について、小学校6年の授業で、小池(1991, pp. 109-110 参照)は「第三連の様子を読み取るために目をつけた語句がありますか。比べた言葉も言ってください」と発問している。そして、これによって、「『ふんわり』ではただ上にうかんでいるだけ……『うっとり』だと喜びといっしょにうかんでいるような感じ」, 「『うかんでいる』って書くと……心がうきうきしているみたい」という解釈が促されている。また、「希望もゆめも幸福もいっばいであふれるほど」という解釈も促されている(下線は引用者)。

これらの解釈内容は、(9)の表現の〈雰囲気〉を〈肯定的なもの〉として捉えていると言えよう。しかし、この表現の解釈は、こうした〈肯定的なもの〉につけるわけではない。つまり、この表現は多義的に解釈できる。そして、そうした多義性は、隠喩の基本形を意識すれば明らかになってくる。

(9)の表現には、基本的に二つの「用言述定型」隠喩が見出せる。すなわち、〈希望もゆめも幸福も、うっとりしている〉と〈希望もゆめも幸福も、浮かんでいる〉である¹¹。こうした用言述定型隠喩は、2.2.3で述べた基本形とその派生という考え方を適用すれば、次のように解釈できる。

- (10) a. 〈希望もゆめも幸福も、うっとりしている〉
b. 〈希望やゆめや幸福は、(例えば)何か心に奪われている人だ〉
c. 〈何か心に奪われている人が、うっとりしている〉
(11) a. 〈希望もゆめも幸福も、浮かんでいる〉
b. 〈希望やゆめや幸福は、(例えば)雲だ〉
c. 〈雲が、浮かんでいる〉

(10 a)の「用言述定型」隠喩は、(10 b)の基本形として解釈することができる。つまり、主辞〈希望やゆめや幸福〉を、例えば喩辞〈何か心に奪われている人〉と対立させて解釈するわけである。そうすると、喩辞の様々な解釈内容のうち、先に引用した解釈にあった〈喜びといっしょに〉という解釈内容を主辞に当てはめることもできる。この場合、主辞を〈肯定的なもの〉と解釈していると言える。しかし、この喩辞の〈我を忘れている〉といった解釈内容も、

主辞には当てはめられる。この場合、主辞を〈必ずしも肯定的なものではない〉と解釈していることになる。そうすると、主辞を、先の引用にあるような〈希望もゆめも幸福もいっぱいであふれるほど〉とだけは解釈できない。そうではなく、〈希望やゆめや幸福が他の大事なことを忘れさせている〉といった解釈になろう。

また、(11 a) も、(11 b) の基本形として解釈することができる。つまり、主辞〈希望やゆめや幸福〉を、例えば喩辞〈雲〉と対立させて解釈するわけである。そうすると、同じように、先の引用にあった〈うきうきしている〉という解釈内容だけではなく、〈不安定さ〉といった解釈内容も主辞に当てはめられる。そして、この場合、〈すぐに消えてしまいそうな希望やゆめや幸福〉といった解釈もできるわけである。

このように、主辞〈希望やゆめや幸福〉の解釈内容に即して、喩辞の解釈内容のうちどんな解釈内容を当てはめるかによって、主辞の解釈は変わってくる。つまり、この《支度》の3連の表現は、多義的に解釈できるようになっている¹²。従って、指導においては、そうした多義性に対応した解釈ができるような手立てがいる。そうした手立ての一つとして、ここで述べたように、一見複雑に見える隠喩を基本形に還元して解釈を促すことが考えられる。

2.3 直喩の多義性

2.3.1 直喩指導における問題点

先に言及したブラック (Black, 1955, p. 282) は、「代用説」とは別に、「隠喩を短縮された、あるいは省略された直喩とする説」を、隠喩の「比較説」と呼んでいる。この立場では、直喩と隠喩は、その表現構造上「ようだ」、「ような」、「ように」といった指標があるかないかによって区別されるにすぎない。つまり、そうした指標があれば直喩であり、指標が省略されれば隠喩となる。

こうした立場は、現在の比喩指導において常識となっていると言ってよかろう。例えば、文学作品の表現方法について意図的な指導を試みている「教育技術の法則化運動」の「分析批評」においても、そうした立場がとられている (愛知「分析批評」研究会, 1989, pp. 18-19, p. 79, 浜上, 1990 b, pp. 118-119 参照)。

確かに、直喩と隠喩は、表現構造上は上記のような指標の有無によって区別することができる。しかし、こうした表現構造上の区別だけでは、隠喩と直喩が表現機能上異なるのか同じなのかは説明がつかない。つまり、隠喩と直喩は表現構造上異なっているから解釈の仕組みも異なるのか、それともそれにもかかわらず両者の解釈の仕組みは基本的に同じなのか、という問題である。

2.3.2 直喩の類型とその解釈の仕組み

こうした問題を考えるために、隠喩の場合と同様に、類型論を採用して直喩解釈の仕組みを検討してみよう。直喩は、基本的に二つの類型に区別できる。

第一の類型は、「叙述的」直喩である。この直喩は、〈ようだ〉という指標を持つ (利沢, 1985, p. 226 参照)。例えば、次の三好達治《土》(下線は引用者) を見てみよう。

(12) 蟻が

蝶の羽をひいて行く

ああ

ヨットのやうだ

(12)の直喩表現は、指標《やうだ》を省略して《ヨットだ》としても表現上成り立つ。つまり、先の(9)における《希望も／ゆめも／幸福も／……／浮かんでいるようです》(下線は引用者)と同様に、隠喩として解釈しても不都合はない。言い換えれば、〈蝶の羽は、ヨットだ〉という隠喩の基本形に還元して解釈できるわけである。従って、「叙述的」直喩の解釈には、隠喩の基本形と同じ解釈の仕組みを適用できることになる。

第二は、「限定的」直喩である。これには、《よくな》という「形容詞的」指標を持つものと、《ように》という「副詞的」指標を持つもの、がある(利沢, 1985, pp. 226-228 参照)。例えば、先の(4)にある《わたしを……／あらせいとうの花のように／白い葱のように／束ねないでください》といった直喩表現である(下線は引用者)。

この直喩表現における「副詞的」指標《ように》は、表現構造上省略できない。つまり、この表現における《ように》を単純に省略すると、表現として成り立たなくなる。しかし、この表現は、次のように解釈できる。

- (13) a. 〈わたしは、あらせいとうの花ではない〉
b. 〈わたしは、白い葱ではない〉

(13 a), (13 b) は、隠喩の基本形と同じ形式とみなせる。つまり、〈わたし〉を〈あらせいとうの花〉、〈白い葱〉と対立させて解釈するのである。このように考えると、〈ように〉という指標を持つ「限定的」直喩にも、隠喩の基本形と同じ解釈の仕組みを適用できることになる¹³。

例えば、川島(1991, p. 84 参照)は、この直喩表現について、「あらせいとうの花や白い葱のように束ねられている状態を思い浮かべてみよう」と発問している。それによって、「店先にきれいに五本とか六本とか、束ねられている」、「二、三箇所、ゴムかひもで縛ねられている」という解釈が促されている(下線は引用者)。そして、「そういう状態を人に喩えてみたらどう?」と発問を続けている。それによって、「束にしないで私個人を認めてほしい」、「切られたくない、大地で根をはって実をつけていきたい」という解釈が促されている。

ここに見られる解釈は、〈わたし〉を〈あらせいとうの花〉、〈白い葱〉と対立させた解釈と言えよう。つまり、〈あらせいとうの花〉、〈白い葱〉の〈店先にきれいに(並べられている)〉、〈縛られている〉といった解釈内容が、〈わたし〉に当てはめられて解釈されている。つまり、この直喩表現は(13 a), (13 b)として解釈されていることになる。

このように、指標の有無という表現構造上の違いもかかわらず、直喩には隠喩と同じ解釈の仕組みを適用できる。つまり、直喩表現にも、隠喩表現と同様に多義性という表現機能を見出せる。従って、直喩指導においても、その多義性に対応した指導が必要となる。

3 ま と め

以上のように、隠喩・直喩表現の表現構造がどのようにして多義性という表現機能を発揮す

るか、について述べた。つまり、隠喩・直喩とも主辞と喩辞という二つの異質な辞項が対立するという構造を基本形として、多義性という機能を発揮するのである。

こうした観点からすれば、(1a)から(1c)にあげた隠喩・直喩指導上の問題点は、改善される必要があると言えよう。つまり、隠喩指導、とりわけ「対象指示型」隠喩の指導では、喩辞から主辞への還元だけの指導が生じやすい。しかし、そこにとどまらず、主辞と喩辞の二項対立という隠喩の基本形を明確にし、主辞と喩辞の双方向的影響を考慮して多義的な解釈を促す指導の手立てがとられるべきである。また、直喩指導においても、隠喩指導と同様に、主辞と喩辞の二項対立に基づいて、多義的な解釈を促すべきである。そうしたことが、作品のより豊かな解釈を促すことにつながるはずである。

こうした指導方法論を認めるならば、ではそのような指導においては何が教育内容となるのか、が問われることになる。例えば、隠喩・直喩とはどのような構造を見出せる表現なのか、またそれらにはどんな類型があり、そうした類型中の基本形は何かといった内容が、教育内容となることも考えられる。これらは、いずれも作品の表現構造にかかわる内容である。

しかし、こうした隠喩・直喩の表現構造にかかわる内容を知っていればそうした表現を多義的に解釈できる、とは必ずしも言えない。多義的な解釈ができるためには、隠喩・直喩の多義性という表現機能そのものを意識することが必要であろう。つまり、(7)、(8)にあげたような隠喩・直喩解釈の仕組みを意識して、隠喩・直喩の解釈を行うことである。

このように考えると、多義性という多義的な解釈を可能にする文学作品の表現機能を教育内容とする、という教育内容構成の観点を仮説的に設定できるのではなからうか。つまり、他の言語作品と異なって、文学作品に特徴的に見出せる表現機能、すなわち文学作品を文学たらしめている機能を教育内容とする、という観点である。

こうした文学作品に特徴的な表現機能は、多義性だけに限られるわけではない。例えば、表現の伝達内容よりも表現の仕方そのものへの注意を喚起する機能もある。また、既存の「コード」を打ち破るような、文脈により大きく依存した解釈を促すような機能も考えられる(藤原・山住, 1988, 藤原, 1989 a参照)。さらに、解釈を通して、解釈者の常識的なものの見方を「異化」するような機能も考えられる(藤原, 1985 参照)。こうした文学作品に特徴的な表現機能を、ここでは言語の「詩的機能」と呼んでおこう。

そうすると、文学作品の読み方指導全般において、言語の「詩的機能」を教育内容とするという観点で指導を構想することが可能になろう。つまり、言語の「詩的機能」の教育、言い換えれば「詩的言語教育」として、文学作品の読み方指導を構想するのである。

ただし、こうした観点には、検討すべき課題が多い。例えば、鶴田(1990, pp. 125-135 参照)は「言葉の機能を『論理的機能』と『美的機能』(ここで言う「詩的機能」—引用者注)」に分けて、そうした「言葉の機能の自覚を促す」指導の必要性を主張している。ただし、鶴田は、一方で「言語表現の基本的な原理・方法」が教育内容となると述べている。こうした「原理・方法」と「詩的機能」はどう関係するのであろうか。また、いわゆる「文芸学的概念」を教育内容とする観点(鈴木・三上, 1986, pp. 77-78 参照)と、「詩的機能」を教育内容とする観点はどうか関係するのであろうか。こうした問題の考察が、今後の課題となる。

注

1 本稿では、比喩において喩えられている側の辞項を「主辞」、喩えている側の辞項を「喩辞」と呼ぶことにす

る。例えば、《男は狼だ》という隠喩において〈男〉が主辞、〈狼〉が喩辞となる（〈 〉は表現を、〈 〉は表現の解釈内容を表す）。

なお、隠喩理論では、ある表現を隠喩と認定する際の基準が問題にされることがある。ここでは、《男は狼だ》のような〈XはYだ〉という形式において、主辞と喩辞に相当する辞項を見出せるときその表現を隠喩とみなす、という基準を仮に設けておこう。こうした基準は、解釈者を志向した基準、つまり語用論的基準と言えよう。

- 2 作品の文脈を無視すれば、《山は、いつもおとなしいが暴れだしたら手がつけられない》は、隠喩的表現とみなせるであろう。しかし、(2)では明らかに〈山〉が主辞、〈大きな牛〉が喩辞である。従って、ここではこの表現の隠喩性は問題としない。
- 3 こうした〈石が独りいた〉に相当する表現は、普通「擬人法」と呼ばれる。ただし、ここで述べているような隠喩類型論を採用すれば、「擬人法」というカテゴリーを取り立てて設ける必要はなくなる。つまり、「擬人法」は、多くの場合「用言述定型」隠喩に含まれることになる。なお、「擬人法」には、換喩に分類されるものもある。
- 4 橋元 (1989, pp. 146-150 参照) はここに引用した類型の他に「修飾用法」、「諷喩」という類型をあげている。前者は、「用言述定型」と「体言述定型」を変形して名詞句化したものである。後者は、字義的な表現である一文全体が文脈によって隠喩的に解釈できるものである。なお、他の隠喩類型論については、利沢(1985, pp. 85-98)、山梨 (1988, pp. 15-20)、小泉 (1990, pp. 186-193) などを参照。
- 5 (6a) の〈石が独りいた〉という隠喩において、〈独りいた〉が喩辞で、主辞は〈一つあった〉になると考えられないこともない。しかし、ここでは、「対象指示型」・「用言述定型」は基本形の「体言述定型」に還元でき、その基本形〈XはYだ〉の〈X〉が主辞、〈Y〉が喩辞とする立場をとる。
- 6 例えば、Black (1955, p. 291-292)、安井 (1978, pp. 105-110)、Levin (1979, pp. 128-131)、山梨 (1988, pp. 20-23)、橋元 (1989, pp. 151-159)、楠見 (1992, pp. 40-52) などを参照。
- 7 喩辞に関する解釈内容は、「連想された通念の体系」(Black, 1955, p. 287)、「含意のネットワーク」(Lakoff & Johnson, 1980, p. 140)、あるいは喩辞を「プロトタイプとするカテゴリー」(ニヶ崎, 1990, p. 63) と呼ばれることがある。
- 8 主辞に当てはめる解釈内容については、山梨 (1988, p. 27) の言う「顕現特性」、橋元 (1989, pp. 153-154) の言う「基核属性」を参照。
- 9 その他に、作品全体の文脈も、喩辞の解釈内容の選択にかかわっている。ただし、ここでは隠喩解釈の仕組みを明確にすることが主眼であり、文脈の問題は扱っていない。
- 10 隠喩解釈の仕組みについては、喩辞から主辞の一方向的な影響のみが論及されることが多い。例えば、楠見 (1992, pp. 47-48) は「主題（ここで言う主辞—引用者注）のもつ意味範囲を、たとえる語のもつ顕著な意味の方向に制約を加える」という。しかし、「比較の一方の辞項が他の辞項を修飾するのと同じ程度の、逆の作用が起り得る」(Levin, 1979, p. 128) という立場もある。ここでは、後者の立場を採用している。

なお、先の川島 (1991, p. 83 参照) の指導では、喩辞の「情景的な意味の読み取り」から主辞の「抽象的な意味の読み取り」という比喻指導の手立てが構想されている。こうした手立てでは、喩辞〈Y〉の当てはめられるべき解釈内容を主辞〈X〉の解釈内容が規定する側面について意識されていないことになる。
- 11 〈うっとり〉という表現を〈うっとりしているかのよう〉と解釈すれば、これは直喩ともみなせる。また、《浮かんでいるようです》(下線は引用者) は明らかに直喩表現であるものの、《ようです》は表現構造上省略できる。つまり、この表現は《ようです》を省略した隠喩として解釈できる。従って、ここでは、この表現を隠喩として扱っておく。こうした隠喩と直喩の関係、及び直喩解釈については、2.3 を参照。

12 小池 (1991, p. 103 参照) は、教材解釈として「『うかぶ』とは……地に足が着いていないというイメージ」、「希望やゆめや幸福が、本人にもあまり自覚のない状態で……ただよっている」と述べている。こうした解釈は、どちらかと言えば肯定的でないものであろう。なお、こうした解釈は、終連《ごったがえす／人いきれのなかで／だけどちよっぴり／気がかりです／心の支度は／どうでしょう／もうできましたか》の解釈からも可能になる。つまり、この〈肯定的でない〉解釈は、文脈依存的でもある。

13 同様に、〈ような〉という「形容詞的」指標をもつ「限定的」直喩も隠喩の基本形に還元できる。例えば、〈白魚のような手〉を〈手は白魚だ〉と解釈するわけである。

なお、利沢 (1985, p. 227) は「構造的にはメタファーとは関連性がない」「限定的」直喩を「シミリーの真価を発揮する場所」とする。そして、こうした直喩では「隠喩とはちがって二つの観念体系（ここで言う主辞と喩辞—引用者注）が……お互いに干渉し合わない」（利沢, 1985, p. 217）とする。つまり、「限定的」直喩の解釈では主辞と喩辞の間に双方向的な影響は見出せないと言うのである。しかし、ここでは今述べたように「限定的」直喩も隠喩の基本形に還元できるとみなしている。従って、直喩解釈においても、主辞と喩辞の間の双方向的な影響を見出せるわけである。

引用作品出典

- 黒田三郎「支度」『新選黒田三郎詩集』思潮社, 1979.
草野心平「石」『日本の詩歌 21』中央公論社, 1975.
三好達治「土」『三好達治詩集』新潮社, 1951.
嶋岡晨「虻」『嶋岡晨詩集』思潮社, 1986.
新川和江「わたしを束ねないで」『新川和江詩集』思潮社, 1975.

文 献

- 愛知「分析批評」研究会 (編) 1989「分析批評」ワーク・レトリック教室 I. 明治図書
尼ヶ崎彬 1990 ことばと身体. 勁草書房.
Black, M. 1955 Metaphor. *Proceedings of the Aristotelian society*, 55, 273-294. 尼ヶ崎彬 (訳) 隠喩. 佐々木 (1986), pp. 2-29.
藤原 顕 1985 文学作品の指導における「異化」の問題について. 北海道大学教育方法学研究室 (編) 教授学の探究, 3, 41-53.
——— 1989 a 文学作品の指導における作品構造と学習者の解釈活動の関係について. 北海道大学教育方法学研究室 (編) 教授学の探究, 7, 69-82.
——— 1989 b 文学の授業における解釈と発問. 関西教育学会紀要, 13, 89-93.
藤原顕・山住勝広 1988 文学作品の指導における発問構成モデルに関する一考察. 教育方法学研究, 13, 93-101.
浜上 薫 1990 a 「分析批評」の授業づくり 2・5年の実践. 明治図書.
——— 1990 b 「分析批評」入門・「10」のものさし. 明治図書.
橋元良明 1989 背理のコミュニケーション. 勁草書房.
川島和子 1991 わたしを束ねないで. 甲斐睦朗 (編) 語句に着目した読み方指導 10. 明治図書. pp. 75-89.
小池英理子 1991 支度. 甲斐睦朗 (編) 語句に着目した読み方指導 9. 明治図書. pp. 99-116.
小泉 保 1990 言外の言語学. 三省堂.
橋見 孝 1992 比喩の生成・理解と意味構造. 箱田裕司 (編) 認知科学のフロンティア II. サンエンス社. pp. 39-64.

- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980 *Metaphor we live by*. The University of Chicago Press. 渡辺昇一ほか(訳) 1986 レトリックと人生. 大修館書店.
- Levin S.R. 1979 Standard approaches to metaphor and a proposal for literary metaphor. In A. Ortony (Ed.) *Metaphor and thought*. Cambridge University Press. pp.124-135. 青木孝夫(訳) 隠喩の標準的な解読法と文学的隠喩. 佐々木(1986), pp.141-160.
- 利沢行夫 1985 戦略としての隠喩. 中教出版.
- Ruwet, N. 1975 Synecdoque et métonymie. *Poétique*, 23, 371-388. 青山昌文(訳) 提喩と換喩. 佐々木(1986), pp.187-223.
- 佐々木健一(編) 1986 創造のレトリック. 勁草書房.
- 鈴木秀一・三上勝夫 1986 文学作品の読み方指導論. 明治図書.
- 鶴田清司 1990 国語教材研究の革新. 明治図書.
- 山梨正明 1988 比喩と理解(認知科学選書17). 東京大学出版会.
- 安井 稔 1978 言外の意味. 研究社出版.